Ⅰ　推定第１次朝堂院地区の調査（第102次）

平城宮跡第102次発掘調査は、推定第１次朝堂院地区の東北部（6ABF−B、6ABG−A、6ABS−B、6ABT−A地区）で行なった。調査地区の北は昨年度におこった第97次調査地に接する。本調査地区内には建物の基壇跡と考えられる土壇が２つ存在するが、この土壇はまた、第97次調査で確認した礎石建物SB8400の南延長部にあり、今回はこの礎石建物基壇の南限と土壇との関係をあきらかにするためにおこなった調査である。調査は昭和52年４月６日に開始し，８月29日に終了した。調査面積は3720㎡である。

１　遺　構

調査区は推定第１次内裏地域から延びる小支丘の東南部で、東・南に下るなだらかな斜面部にあり、谷筋に沖積した軟弱な黒色粘土が地山面である。地山面は西・北が高く、東・南が低い。これを整地で平坦にし、遺構を構築している。地山面に盛った整地土は４層に分かれ、下から第１整地層、第２整地層、第３整地層、第４整地層と名付けた。検出した主な遺構は、建物２棟、掘立柱塀３条、築地塀１条、溝10条などである。これらの遺構は整地層を基準に４期に分けられる。

第１期

第１整地層に造営された遺構で、溝１条、塀１条がある。

SD3765は築地の西４ｍにある南北溝である。第１整地層上面から掘り込まれ、第２整地層で埋め立てられる。調査区を南北に貫き、さらに南に続く。溝幅２〜2.5ｍ、深さ60㎝あり、溝中には２層の堆積がみられる。下層は青灰色砂層で厚さ15〜20㎝、上層は暗黒灰粘土が堆積している。調査区の南を20ｍの範囲で掘り下げたが、埴輪片が若干出土したのみである。整地層との関係からSD3765は和銅造営期にはさかのぼらない。

塀SA8410はSD3765の東17.5ｍにある掘立柱南北塀である。柱間は10尺で19間分を検出したがさらに南に続く。柱掘形は一辺1.5〜2.0ｍの矩形で，深さは約40㎝で浅い。底面は凹凸が激しく、柱痕跡がないことから、掘形だけを掘って計画変

更したものと思われる。なお、北から10間目と11間目の掘形から、木簡が1点ずつ出土している。うち11間目の掘形出土木簡は若狭国の米の付札である。年紀はないが、記載内容から和銅年間に比定される。

第2期

第2整地層上に造営された遺構で、土手状高まり2条、塀1条、溝2条がある。

土手状高まりSX8560は築地下にあり、調査区の南北を貫いて畦状に築かれる。幅1.5m、高さ35cmあり、発掘区の南端近くで、東西方向に走るSX8559とつながる。SX8559の西端はSB8550の基壇掘り込みで壊され、SD3765上には存在しない。

SX8559は、幅1.8m、高さ30cmである。

塀SA5550Aは推定第1次朝堂院の東面を画する南北塀である。第41・97次調査で26間分（77m）確認しているので、今回の19間分を含めて合計46間分（137m）を確認した。柱間は3m。掘形は約2mの方形で深さは1.2mである。この塀の廃絶後、第2整地層に浅い掘り込みをし、地業をおこなった上に築地が作られている。第97次調査では、SA5550A・B・Cの3期を想定し、塀→築地→塀の変遷を考えたが、今回の調査で、SA5550 CがSA5550 Aの柱の抜き取り穴であることを確認した。したがって3期の変遷ではなく、塀→築地の2期の変遷となる。SA5550Aは推定第1次朝堂院の想定中軸線から東へ107m（360尺）離れ、塀で囲まれる推定第1次朝堂院の東西幅は214m（720尺）となる。抜き取り穴からは瓦が出土しているが、SA5550Aは藤原宮式の瓦を葺いた南北塀と考えられる。

溝SD3715は平城宮の推定第1次朝堂院と推定第2次朝堂院の間を流れる南北大溝で、幅2～3m、深さ1mである。奈良時代を通して存続する。上層溝、下層溝の2期に分かれる。下層溝は下から暗黒色粘土（厚さ5～10cm）、黄褐粗砂（10～15cm）、黒色粘土（30～35cm）の3層があり、このうち黒色粘土層が第97次調査で158点の木簡を出土した暗灰粘土層と対応する。本調査でも木簡は出土したが数は少なく、土器・瓦類の出土も少ない。上層は灰色砂礫層と灰色バラス層の2層に分かれ、灰色砂礫層から木簡が出土し、なかに「去天平五年」の紀年木簡があった。第97次調査暗灰粘土層出土木簡の年紀と考え併せると、本溝の改修の時

期を天平初年頃におくことができよう。

第３期

第３整地層上に造営された遺構で、礎石建物２棟、築地塀１条、溝１条などがある。

築地SA5550Bの基底部積土は、SA5550Aの柱を抜いた後、第２整地層上面に粘質土、砂質土で積まれる。積土は西縁に良く残っており、東側は明治以降の用水路で壊されており、築地本体の幅は確認できなかった。築地西縁に沿って南北溝SD8392がある。幅40㎝、深さ５～10㎝程の溝であるが築地西側の雨落溝と考えられる。

SB8400（東第１堂）・SB8550（東第２堂）　SB8400は南限を検出し、第97次調査と合わせてその規模が明らかになった。SB8400の基壇積土は調査区北端から30ｍにわたって検出した。その南９ｍが途切れ、SB8550の基壇積土が南に続く。東西幅は19.6ｍであり、積土上面で礎石据付痕跡９個所と足場用柱穴SB8554・SB8555を検出した。礎石据付痕跡の遺存状況は悪いが、南北15尺、東西11.5尺間隔に根石が並ぶ。うち１ケ所を断ち割ったが、浅い皿状掘形の底部に敷き並べてあり、掘形の底は基壇掘り込み面より50㎝程上面になる。足場穴SB8554・SB8555は15尺間隔で南北方向に柱筋を揃える。SB8554は東西縁で重複がみられる。新しい足場穴SB8554BはSB8400の部分的補修（改築）のための施設と考えられる。この結果SB8400は東西長19.6ｍ、南北長50ｍの基壇で桁行10間15尺等間、梁行４間11.5尺等間の南北棟建物を想定できる。SB8550もSB8400と梁行が等しく、桁行５間分を検出し、さらに調査地区外の南に続いている。なお第97次で検出した礎石の高さが１ｍあり、今回検出した根石レベルが地業面から50㎝あることから、1.5ｍ程の基壇高が想定されようが、階段や地覆石などの形跡はみられなかった。また基壇実測後、数個所にトレンチを設けて基壇築成状況を追査したところ、複雑な地下地業をおこなっていることがわかった。それによると、まず基壇範囲を掘り込み、黄褐色土を入れて版築状につき固めるが、ちょうど各桁行柱に相当する部分は掘り残し、更にこの掘り残した部分も棟通りを除いて坪掘りを行い、暗褐色土を入れて版築状につき固める。この地業はSB8400とSB8550を一連でおこなって

いるが、両建物の基壇間にあたる部分だけは坪掘りをおこなわずに、東西に長い布掘り状の掘り込みをして版築をおこなっている。一見2段階にわけておこなわれたようにみえるこの地業のうちで、坪掘り部分は南北方向で各16尺間隔にあり、基壇上面の残存根石列から想定される桁行柱間15尺と異なっており、このずれがSB8400では南で小さく、北に従って大きくなり、SB8550では北で小さく南に行く程大きくなる。この相違についてはなお検討の余地があるが、当初桁行柱間を16尺等間で計画していた建物を地下地業の段階で何らかの理由によって当初の柱位置をずらす必要が生じてきたため掘り残した部分も坪掘りをおこなった結果ではないかと考えられる。

溝SD8552は調査区の南北を貫通し、南に続く。幅70㎝、深さ25㎝あり、やや規模は小さいが、築地と基壇建物を区画した溝と考えられる。この溝の東西縁にそってSA8553があるが、規則的な間隔はとらず南の方で消滅する。

土壙SK8563は6ABT区南で検出した。6ABT区内より南に延びる幅15㎝、深さ5～10㎝の細溝SD8561に切られている。長径80㎝、短径30㎝、深さ20㎝程の小土壙である。

第4期

SB8400・SB8550廃絶後の時期である。第97次調査でSX8390とした瓦を多量に含む整地層（第4整地層）と同一で、出土遺物から平安時代以降とみられる。

凝灰岩列SX8551は、約50㎝平方、厚さ8㎝の凝灰岩切石を東西方向に一列に敷き並べたもので、10枚を残すが性格は不明である。この他に溝SD8556がある。

2　遺　物

1　木簡

木簡はSA8410の柱掘形埋土から2点、SD3715から28点の計30点出土した。このうちSD3715では上層と下層溝から各々14点ずつが出土している。以下、おもな木簡を例示する。

少丹生里^{米七斗}^{秦人老五}〔戸カ〕□

SA8410の北から11間目の柱掘形より出土。米の付札。和名抄の若狭国遠敷郡遠敷

郷にあたる。里制であることや里名記載が和銅六年の国郡里制の好字表記以前の記載であることから和銅年間のものと考えられる。

・右以去天平五年八月廿一日□

□遭服罷仍具(状)録以申送

・「伊福部宿祢廣濱(年大)卅(倭)三(国)十市郡」(側面)

年紀を有する唯一の木簡。表は服喪による休暇願の内容である。

・受古釘六隻重十二斤(損)二斤八両□(九)斤八両(作カ)□五寸打合釘

・五十一隻　四月廿二日刑部麻呂

釘作成に関する文書。SD3715上層溝出土。なおこれに関連してSD3715からは第97次調査で神亀～天平初年の造営関係の木簡が出土している。

以上の他にSD3715から讃岐国山田・那珂郡、近江国浅井郡の貢進物付札がある。

2　瓦

瓦は軒丸瓦299点、軒平瓦250点の他に丸瓦、平瓦がセメント袋500袋程が出土した。大半が第4整地層出土である。軒丸、軒平瓦では全出土数の約80％が平城宮造営当初から天平年間までのⅠ・Ⅱ期の瓦である。SA5550抜き取り穴から藤原宮式の瓦が出土しているが、SA5550に葺かれたものと考えられる。整地層出土の瓦のうち、築地西側の第2整地層上面、第3整地層からⅠ・Ⅱ期の瓦がほぼ同じ比率で出土している。しかし、築地東側の第2整地層、第4整地層でⅡ期の瓦が圧倒的に多くなる。瓦の出土状況からも築地の東西で整地の様子が異なっていることが指摘できる。

3　土　器

土器の出土量は少なく、朝堂院地区の特徴を示している。

4　木製品

人形1点、杓子2点、笄1点、箸10点、礎板1点が出土した。その他に加工棒・板約400点、加工木約150点がある。すべてSD3715からの出土である。

まとめ

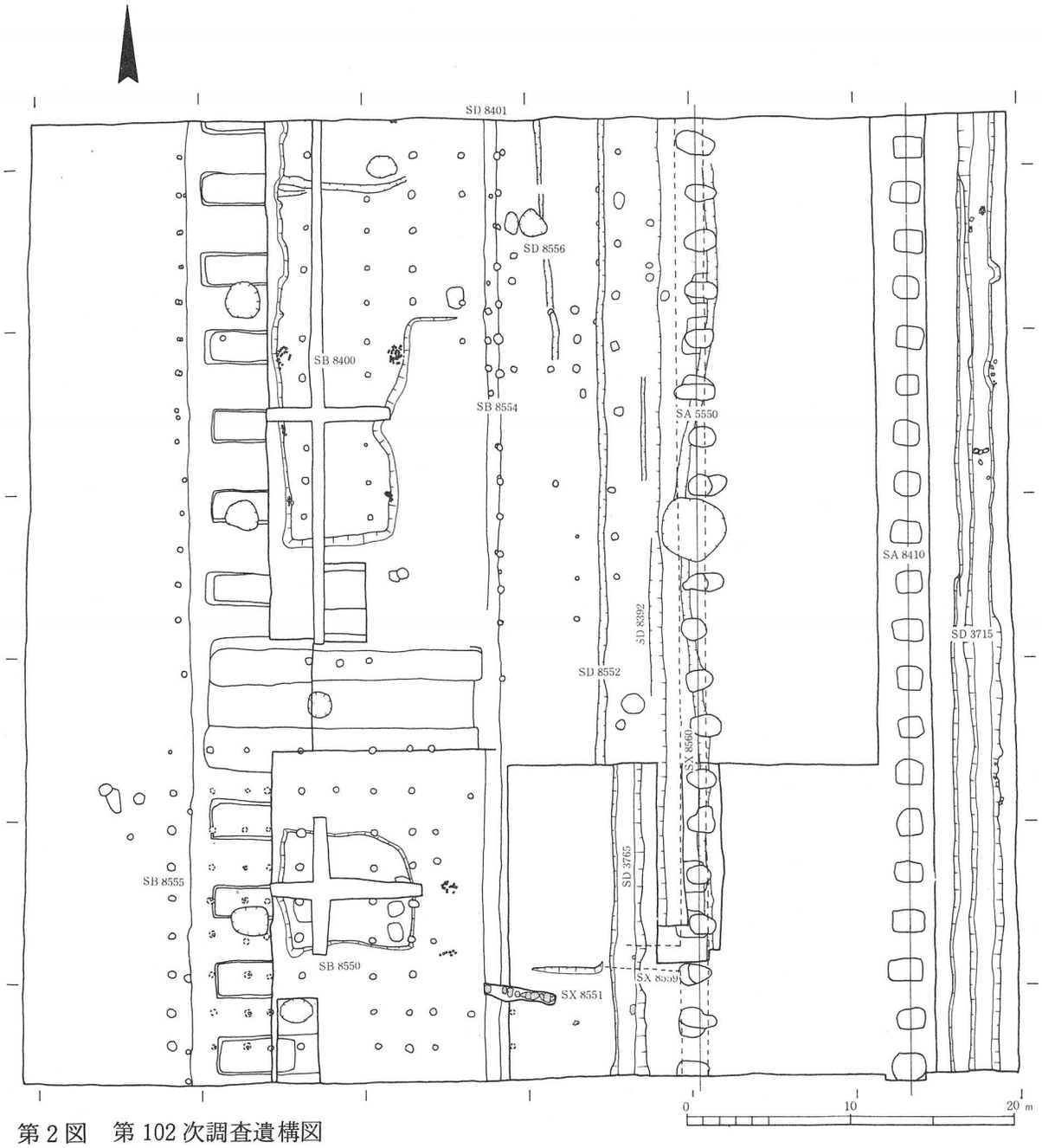
第1～4期の性格、時期を推定第1次内裏地区の変遷、第97次調査で設定した

A～D期と対応して考えてみたい。ただ今回の調査では第97次調査のA期（和銅創建当初）に比定できる遺構は存在しなかった。

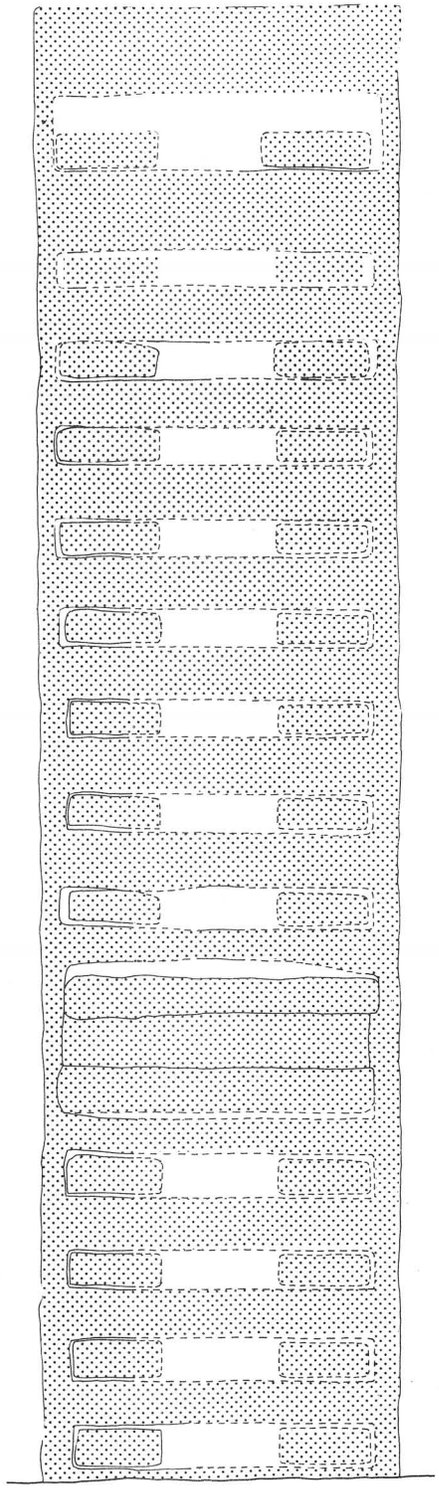
第1期：　第1次内裏地区変遷のAⅠ期、第97次調査のB期にあたる。SA8410は柱痕跡がみられず、掘形底面は浅く、軟弱で凹凸が激しかった。SA8410は計画しただけで廃絶した可能性が強く、実際に機能していたかは問題である。第97次調査以北が未調査であることから、SA8410が推定第1次朝堂院の東面を画する施設であるかどうか断言できないが、推定第1次朝堂院の想定中軸線から東へ約120 m（400尺）の位置にある中軸線で折り返し、SA8410で区画された場合の東西幅を求めると、約240 m（800尺）となり、藤原宮朝堂院の東西幅よりやや大きい区画となる。

第2期：　内裏地区変遷のAⅡ期、第97次調査のC期にあたり、霊亀～養老年間に相当。SD3765・SA8410がともに廃され、第2整地層上に造営がおこなわれる。第97次調査で検出したSA5550A・Cは、今回の調査で第2期の塀の掘形と抜き取り穴であることを確認した。第97次調査同様、今回の調査でもこの時期に比定する朝堂建物は検出していない。

第3期：　内裏地区変遷のAⅢ期、第97次調査のD期に対応する。SA5550A・Cを埋めて、築地に建て替え、SB8400・SB8550の地業をおこなって建物を建てる。この期の整地は朝堂院地区内に限られ、築地の東には存在しない。また朝堂建物を神亀年間におくことは、第97次調査の知見と矛盾しない。第3期を通じて、推定第1次朝堂院地区の建物の基本的な変化はなく、宮廃絶まで存続したと考えられる。そして第4期（平安時代以降）には、朝堂建物は存在しなかったことになる。



第2図　第102次調査遺構図



SB 8400・8550 基壇掘込地業復原図